山口県小学校長会報

発行所
山口県小学校長会
代表者　吉鶴　修
校長会事務局
山口市大手町2-18
☎　083-925-2919
FAX 083-925-6776
印刷所
大村印刷株式会社

新学習指導要領の実施に向けての課題と学校経営

山口県小学校長会　会長　吉鶴　修

一　はじめに

新学習指導要領では、これからの学校には、一人一人の児童が持続可能な社会の担い手となれるようにすることが求められている。

そのためには、「社会に開かれた教育課程」を創造し、そのカリキュラム・マネジメントを行うこと、授業改善によって「主体的・対話的で深い学び」を実現し、各教科等を通して、未来を切り拓くための資質・能力を育成すること、また外国語教育や道徳教育、特別支援教育等の充実・改善を図ることなどが重要である。

これらのことを実践し、教育的な効果を上げていくためには、様々な課題があり、学校経営を通して、これらの課題解決に向かうことが大切である。

二　コミュニティ・スクールとしての学校経営

「社会に開かれた教育課程」の中で、児童の多様で質の高い学びを創造するためには、学校のみならず、家庭・地域も含めた関係者が目標を共有し、連携・協働していくことが大切である。

しかし、学校を取り巻く地域の状況は一律ではない。本県では、全ての小・中学校がコミュニティ・スクールに指定され、平成二十七年度から「やまぐち型地域連携教育」を推進してきた。

そこで、更なる推進を図るためには、取組の成果を三つの機能という視点から検証し、課題をもって「やまぐち型地域連携教育」を学校経営として推進していくことが大切だと考えている。

三　カリキュラム・マネジメントの理解と実践

一般的なカリキュラム・マネジメントとは、「学習指導要領等に基づき教育課程を編成し、それを実施・評価し改善していくこと」であろう。

しかし、「社会に開かれた教育課程」のカリキュラム・マネジメントとなると、次の三つの側面が不可欠となる。

一つ目は教育内容の教科等横断的な配列、二つ目はデータに基づく教育課程のＰＤＣＡサイクルによる検証、三つ目は教育活動におけるローカルリソースの活用である。この三つの側面からのカリキュラム・マネジメントが重要になってくると考えている。

四　授業改善のポイント

社会的変化が予想以上に進み、複雑で予測困難な社会と言われているこれからの社会を自ら切り拓き生き抜く力を身に付けることができるよう、学校教育においては「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行うことが求められている。

そのための研究が、現在各校で校内研修を通して熱心に行われている。研究のポイントは三点だと思っている。

一点目は、各教科の特質に応じた見方・考え方を明らかにすること。

二点目は、その見方・考え方を働かせながら知識を相互に関連付けていく力を身に付けさせること。

三点目は、問題解決的な学習の充実を図ること。

言うは易く行うは難しで、問題解決的な学習を構想することは大変難しいことである。例えば、二つの資料から認識のずれを生じさせたり、これまでの認識を覆すような事実を提示したりして、児童に問題意識をもたせるなどの工夫が必要になる。問題意識をもって学習に取り組むことが「主体的・対話的で深い学び」の出発点になると考えている。

五　学校経営再考のキーワード『変化』

社会は常に変化している。教育も同様である。我々校長は、これからの時代を力強く生きていくことのできる児童を育てる学校本来の役割をしっかりと自覚するとともに、力強い学校経営をしていくために、「常に変化をしていかねばならないこと」と「変化する場合においても、本質的なものは変わってはいけないこと」の両方が重要であるということを忘れてはならない。

イギリスの自然科学者チャールズ・ダーウィンは進化論の中で次のように述べている。『最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるでもない。唯一生き残るのは、変化できる者である』と。

教育における不易と流行をしっかりと押さえ、旧態依然の学校から『変化』を意識し、新しい学校づくりに努めていかなければならないと考えている。

六　おわりに

これまで教育改革が行われるたびに「教育改革の波は教室の前までは来るが、教室の中には入っていかない」と言われることがあった。まず、私たち校長自身が教育改革の意義を理解し、そして、それを教員に分かる形で理解させていくことが重要になる。そのためにも、働き方改革の視点も加えながら、学校経営に当たることが今、大切であると考えている。

研究紹介

研究・研修

学校の教育力向上を図る組織的な研究・研修の推進

～地域連携・小中連携の仕組みを生かした学校運営と校長の役割について～

岩国市立灘小学校長
濱﨑幸貴

一　はじめに

本県では、社会総がかりで子どもたちの学びや育ちを支援する「やまぐち型地域連携教育」の取組を充実させることにより「地域教育力日本一の推進」を図っている。

そこで、本支部では平成三十二年度に全ての小・中学校で小中一貫教育を開始することを受け、「学校の教育力向上を図る組織的な研究・研修の推進」という研究主題のもと、地域連携や小中連携の視点から「研究・研修」の推進についての成果や課題を分析することで、校長の果たすべき役割について明らかにしていくこととした。

二　研究の視点

（一）地域連携・小中連携の仕組みを生かした研究・研修の推進

（二）組織的・計画的な研究・研修体制づくりと教職員の参画意識の向上

三　研究の実際

（一）地域連携・小中連携の仕組みを生かした研究・研修の推進

①小中一貫教育研修の活性化

ア小・中学校が連携して地域資源を活用したふるさと学習カリキュラムを作成した。

イ地域連携・小中連携のよさを生かして学校規模や地域性に応じた研究・研修体制を構築した。

保護者・地域の方と児童で行った学校安全マップづくり

②地域と連携して研究・研修の成果を上げる工夫

ア地域の人材を掘り起こし、その人材を活用して効果的な研修を行った。

イ管理職・ミドルリーダーが中心となって地域連携に全教職員を巻き込む取組を工夫した。

（二）組織的・計画的な研究・研修体制づくりと教職員の参画意識の向上

①プロジェクトチームによる学校課題の解決

ア学校課題を的確に把握し、その解決に組織的に取り組んだ。

イプロジェクトチームで取り組むことのよさと強みを学校課題の解決に生かした。

②教職員の参画意識を高める工夫

アミドルリーダーを活用し、全教職員が自ら学校運営に積極的に携わろうとする雰囲気を作った。

イ地域連携や小中連携のよさや重要性を浸透させ、業務改善につなげた。

四　校長の役割

組織的な研究・研修を推進する上で、校長の果たすべき役割を本支部では次の三点と考えた。

（一）基本方針の明確化と方向性の提示による組織的な研修体制の構築

（二）地域資源・人材に関する情報収集とつながりづくり

（三）組織的・計画的な人材育成につながる研究・研修の深化への働きかけ

五　おわりに

教職員の資質能力の向上には、組織的・計画的・継続的な研究・研修が必要不可欠であり、一人一人の専門性を高めることで学校の教育力が向上する。

そのために地域連携や小中連携等の学校外部の力を効果的に活用することが求められ、校長のリーダーシップが重要となる。本研究により、学校の教育力向上を図る組織的な研究・研修の推進における校長の役割を再確認することができ、今後の学校運営に役立てていきたい。

地域の方に参加して頂いた小中合同研修会

研究紹介

学校安全

地域ぐるみで推進する安全教育・防災教育の充実

～ＫＹＴの活用・地域連携の取組を推進する校長の役割とリーダーシップについて～

周南市立勝間小学校長
相川智幸

一　はじめに

全国的に、登下校時の交通事故や不審者事案等が依然多発している。

また、今年は西日本を中心に集中豪雨に伴う土砂災害や河川の氾濫などの大規模な災害が、本県においても大きな被害をもたらしており、学校安全に関する取組の充実は一層重要性を増している。

周南支部では、昨年度からＫＹＴ（危険予測学習）の有効活用と、地域と連携した実践的な取組の推進に視点を置き、校長としてどのような役割とリーダーシップを発揮すべきかについて継続的に研究を進めてきた。

二　研究の視点

（一）ＫＹＴを効果的に活用するための体制づくり

（二）地域連携に視点を置いた学校安全教育への取組の推進

三　研究の実際

（一）ＫＹＴを効果的に活用するための体制づくり

①プロジェクトチーム体制による教職員の組織的取組

ア教育活動プロジェクトに、健康・安全に係るチームを置いた。

イ地域の声を生かし、実際の通学路を題材としたＫＹＴの資料を作成し指導を行った。

②年間計画に基づいた継続性のある指導体制

ア学校保健安全委員会のテーマに、交通安全・災害安全・生活安全の三領域を位置付け、計画的に実施した。

イ全校朝会で毎月指導担当者が交代しながらＫＹＴを実施した。

全校朝会でのKYT

③課題を踏まえた取組

ア異校種と連携した授業づくり等を通して学習機会を充実した。

（二）地域連携に視点を置いた学校安全教育への取組の推進

①コミュニティ・スクールの機能を生かした取組

ア学校運営協議会委員に防災関係者を任命した。

イ学校運営協議会を通して避難訓練に地域からの参加を求めた。

②地域の防災組織や関係団体との連携

ア地域の自主防災組織等と連携し、学校を使用した避難所体験や通学路の防災点検を実施した。

イ地元企業と連携し、避難訓練や不審者対応訓練を行った。

ウ学校給食を活用した防災給食体験を実施した。

③課題を踏まえた取組

ア専門家と連携し、防災に関する学習会や小中合同訓練を行った。

イ保護者の参画意識を高めるために、児童引き渡し訓練や地域防災訓練を行った。

四　校長の役割

ＫＹＴを効果的に行うためには、校長が体制づくりや担当者への適切な助言を行うことが大切である。

また、防災教育と地域防災とのバランスのとれた取組が行われるようマネジメントしていく必要がある。

今年の豪雨災害では、刻々と変化する状況の中、十分な情報が集まらず対応に苦慮した学校も多かった。校長として、緊急時に情報を集める体制をしっかり整えておくことが重要である。

事件事故も自然災害も、これまでの想定を大きく覆すものが発生する状況にある。校長はもとより、教職員や児童も、想定外が起きる事を想定しなくてはならない。学校安全において、想像を超える様々な事態にも対応できる力を養う視点からの安全教育・防災教育の見直しを、校長が主導的に進めることが大切である。

地域と連携した防災給食

五　おわりに

地域コミュニティの中核としての学校の役割の重要性は高まっており、今後、学校における安全教育・防災教育と地域の取組との連携・融合がますます進んでいくと考えられる。

こうした中で、地域と連携した新たな取組を積極的に取り入れていくには、校長のリーダーシップがますます重要となってくる。

研究紹介

危機対応

いじめの未然防止への取組と組織的な対応

～コミュニティ・スクール、AFPYの活用と教育委員会等との連携～

山口市立鋳銭司小学校長
深井保司

一　はじめに

学校におけるいじめの防止等に係る対策については、一人一人を大切にする教育を推進し、未然防止の取組により、全ての子どもをいじめに向かわせないことが重要である。

本支部では、いじめの未然防止・早期対応に向けて、市内三十四小学校で、「コミュニティ・スクール等を活用した地域との協働」「AFPYを活用した人間関係づくり・授業づくり」「教育委員会等との連携」の三つの視点から実践を進めることとした。そして、これらの取組を踏まえ、いじめの未然防止・早期対応の体制の整備と校長の役割について明らかにしていくこととした。

二　研究の概要

（一）三つの視点からの実践

①コミュニティ・スクール等を活用した地域との協働

ア コミュニティ・スクールの三つの機能による実践

イ「地域協育ネット」による協働

ウ 放課後児童クラブとの連携

②AFPYを活用した人間関係づくり・授業づくり

ア アクティビティによる人間関係づくり

イ AFPYの五つの視点に基づく授業づくり

ウ 児童の主体的な活動による仲間づくり

③教育委員会等との連携

ア オール山口「週一アンケート」の実践

イ「いじめ速報カード」による市教委との連携

ウ 外部人材の活用

（二）成果

①コミュニティ・スクール等を活用した地域との協働

地域との協働による教育活動を活性化し、児童の人間性や社会性や心の成長、そして、いじめの未然防止の根底となる「心を磨く」「心を伝え合う」ことにつながった。

また、地域住民とのふれあいや交流を通して、コミュニケーション能力の向上が見られた。さらに、学校運営協議会や地域の会合での情報交換により、いじめの早期発見・情報共有・早期対応が可能になった。

地域協育ネットでの熟議
「いじめについて」

②AFPYを活用した人間関係づくり・授業づくり

児童に寄り添いしっかりと意識を向け、日頃から積極的な生徒指導や学習指導を通して児童一人一人のよさを理解しようとする教師の姿が見られた。また、児童自身が自分をありのままに認め自己理解を深めることを基盤とし、他者との関わりの中で社会的な自己指導能力を育成することができる学級づくりにつながってきた。

③教育委員会等との連携

「週一アンケート」の実施により、組織的ないじめ対策の流れができてきた。また、「速報カード」により、市教委だけでなく中学校とも情報を共有することで、兄弟姉妹関係や地域性も踏まえ、小・中学校が連携したいじめ防止が行えるようになった。

三　おわりに

いじめの未然防止・早期対応に向けて、市内全小学校で、「コミュニティ・スクール等を活用した地域との協働」「AFPYを活用した人間関係づくり・授業づくり」「教育委員会等との連携」の三つの視点から実践を進めてきた。前述の成果とともに、校長の役割が次のように明らかになった。

○自己肯定感・自己有用感・コミュニケーション能力の育成

○保護者、地域住民に向けた情報発信

○教職員のいじめ認知力の向上

○情報共有・連携の推進

また、いじめの未然防止・早期対応に向けた学校運営協議会のもち方、地域と学校の役割の線引き、道徳の授業改善といじめ防止の関連の検証と教員研修、いじめ根絶の取組状況の評価に対する教職員の理解、「いじめ速報カード」で提出するいじめについての校長の認識、教職員の意識改革・情報共有等に課題が残った。

今後、これらの課題解決に向けて、校長のリーダーシップを発揮して取り組んでいきたい。

研究紹介

社会形成能力

社会をつくる アクティブ・ラーナーとしての基盤を育む教育

～様々な体験活動を通して～

防府市立野島小学校長
濱本昌明

一　はじめに

本支部では、社会形成能力を育むためには「社会をつくるアクティブ・ラーナーとしての基盤づくり」が重要であると捉えた。そして、「個の確立」「よりよい人間関係づくり」「積極的な社会参画」という三つの視点から各校が、ねらいをもって体験活動に取り組み、二回の児童アンケートをもとに、校長としての役割や指導性について研究を進めることにした。

二　研究の視点

（一）自分に自信をもち、自分が何かの役に立っていると自覚する個の確立

（二）他者と自分との違いや多様性を認め、協力・協働できるよりよい人間関係づくり

（三）ひと・もの・ことに積極的に関わる社会参画

三　研究の実際

（一）個の確立の視点

①児童の自主性・主体性を重視した縦割り班活動を仕組む。

②学校やＰＴＡ主催の行事の中に児童の企画・運営による活動を取り入れる。

③地域の伝承文化・自然体験活動に取り組ませる。

（二）よりよい人間関係づくりの視点

①年間を通して異学年交流の場を仕組む。

②縦割り班で地域の自然や歴史にふれるウォークラリーをする。

③同学年のグループで地域の自然にふれたり調べたりする活動を仕組む。

（三）積極的な社会参画の視点

①地域の施設を訪問し、入所者と一緒に活動する場を仕組む。

②地区の行事で子どもたちが主役になれるような場を仕組む。

③「～の日」にちなんで仕上げた作品を地域のお年寄りの方にプレゼントし会話する場を仕組む。

（四）児童アンケートより

地域や社会への貢献・参加が課題であり、その解決のために何ができるか考えさせたり、活動に参加させたりする場を仕組む。

ウォークラリーの様子

四　校長の役割

（一）体験活動のねらい・内容の明確化及び評価を通して、その活動の意味・価値を教職員へ周知徹底させる。

（二）地域の特色を生かし、体験活動を充実させ、地域をつなぐための人間関係づくりを行う。

（三）児童アンケートを市小学校全体で実施し、市全体及び各校の社会形成能力に係る児童の特徴と課題を共有し、その解決のための見通しをもたせる。

五　おわりに

今日の社会は、生活様式、情報伝達手段等が加速度的に変化している。また、学校と家庭・地域との関わりや地域コミュニティも変化している。そのため、社会形成能力の基礎となる社会性や人間関係を育む機能が低下し、コミュニケーション能力や社会参画意識の育成にも影響している。そういった中で今回、本支部は社会形成能力の基礎を育むため、「個の確立」「よりよい人間関係づくり」「積極的な社会参画」という三つの視点から様々な教育活動や体験活動に取り組んだ。そして、児童アンケートを二回実施し、その取組が課題解決につながるかどうかその検証も試みた。今後、子どもたちが、よりよい社会をつくるためには、更に社会形成能力を育てることが不可欠である。また、それは、学校教育の役割であり責任でもある。

野島太鼓の練習風景

支部情報

熊毛支部

～「町」の枠を越えてつながる強い絆～

熊毛支部は、田布施町、平生町、上関町の校長が学校設置者の行政区を越えて集う支部である。学校数は少ないが、近隣の学校同士で情報をやりとりする場があることで、とても心強い気持ちになる。三つの町をまたいでいるとはいえ、教職員は熊毛郡小学校教育研究会という組織に所属し、公開授業研究会をはじめとする研修に取り組んでおり、異動による人的交流もあるため、校長としては、人材育成も重要な課題の一つである。

田布施町は、小学校四校、中学校一校の町である。四つの小学校が足並みを揃え、小中一貫教育を重視した教育に取り組んでいる。町教研には、学習指導、生徒指導、情報教育、養護、事務の五つの委員会があり、小中合同で研修を進めている。町内五校が年に一度は授業を公開し、他校に出向いて研修する仕組みに特色がある。水泳記録会、陸上記録会、駅伝大会等、互いに切磋琢磨する行事も継続している。

平生町は、町の中心部にかつては千人を超える大規模校であった平生小、室津半島の上関町との境までを校区とする佐賀小の二校と中学校一校の町である。佐賀小は小規模特認校に指定され、多様な教育的ニーズに対応している。コミュニティ・スクールについて先駆的な取組を行ってきた町であるとともに、平生町民憲章を大切にした心の教育で、「平生愛」の強い教育風土が特徴である。

上関町は小学校一校、中学校一校の町で、小中一貫教育を目指した取組を進めている。学校運営協議会も小・中学校合同となっており、同じ敷地内にあるメリットを生かして、上関町の義務教育全体としてのレベルアップを目指している。そして今や地域の誇りともなっている「上関水軍太鼓」は地域の行事に引っ張りだこで、地域貢献の中核をなしている。

以上、熊毛支部三町の特色を紹介した。かつて栄華を誇った熊毛王国のように、今後も三町がしっかりと手を携えて、力強く進んでいきたい。

（上関小学校　淺海範明）

新校長の声

「校長室」

阿武町立福賀小学校長　福井章夫

赴任した日、玄関から校長室に入り、鞄を置いた。職員室に入り、先生方に挨拶をし、校長室の机についた。当たり前のことだが、たった一人の「校長室」。自分にこのような広い部屋はもったいない。このような部屋を自分一人で使うのは申し訳ない。そんな思いでスタートした。打ち合わせや会議で慌ただしい毎日だったが、「校長室」は、なんとなく落ち着かない場所であった。

数日後、お世話になった方から葉書を頂いた。偶然にもその文面に「校長室がなぜ広いと思いますか」という問いかけがあり、「校長室は沈思黙考する場所ですよ」ということが書き添えられていた。

今、私はこの教えを実感している。教職員や保護者や地域からの相談や意見について、「校長室」で、児童の幸せのためになるかという視点で沈思黙考している。「校長室」は孤独な場所で苦しくなることもあるが、自分なりに考えを静かに整理できる場所である。「広い校長室」が与えられている意味について考えることで、校長としての責務を再認識している。今日も歴代の校長先生に見守られながら、「校長室」で仕事をさせて頂いている。

でっかい愛をとどけよう

山陽小野田市立出合小学校長　柴田千明

「どうして出合小という名前がついたのですか？」とよく尋ねられる。「出合」の名は、明治二十二年、「山野井村」と「山川村」の合併の折、二つの「山」を重ね合わせたという意味で付けられたそうである。なんと素敵な名前だろう。

この「出合」という名にちなみ、本校では、昨年度から「でっかいあい（愛）をとどけようプロジェクト」を推進している。学校で、地域で、家庭で、誰かのために、何かのために、子どもたち自身ができることを考え、実践するのである。例えば、登下校中の挨拶、学校で育てた花のプレゼント、保育園児への絵本の読み聞かせなど、地域の方にも御協力を頂きながら、様々な活動に取り組んでいる。

人は、「ありがとう」と言われる経験を積むことで、自己有用感が高まると思う。大人も子どもも同じである。

縁あって、新校長としての第一歩を踏み出す場として私に与えられた出合小学校を、ますますでっかい愛があふれる学校にしていきたい。出合小を愛してくださる地域の方とともに。

飛耳長目

島の魅力を生かした教育へ向けて

柳井市立平郡東小学校長　磯部祥生

本年度着任した柳井市立平郡東小学校は、柳井市の南方約二十㎞に浮かぶ平郡島にある。

明治五年に開校した歴史ある学校であるが、少子化のため平成十五年度末に一旦休校。しかし、平成二十四年度に一人の新入生を迎え、再び開校してから本年度で七年目となる。

開校した頃は、全校児童が一名という特殊性もあり、マスコミ等に注目され、様々なメディアで度々紹介された。

子どもたちと先生や地域の方々、訪れたタレント等との温かい交流が全国に放映され、多くの視聴者から反響があった。「こんな島で育った子どもは幸せだろうなあ。教育の原点がありそうだ。」など、ほとんどが肯定的な意見である。

では、本校が多くの人々を惹きつけてやまない魅力はどこにあるのだろうか？着任してわずか数ヶ月ではあるが、私自身が肌で感じた魅力は次の二点である。

① 「子どもは宝」という考えがどの島民にも浸透していること

平郡東地区の方々からよく聞くのが「子どもは宝」という言葉である。本校には月に一回のペースで「地域参観日」と呼ばれる授業公開がある。討論会やワークショップなど、少人数ではできない授業に地域の方に入ってもらい、子どもたちと一緒に学んで頂いている。七夕や亥の子などの季節の行事の際にも協力を惜しまない。だれもが「子どもは宝」の考えのもと、まるで家族の一員として本校の子どもたちを見守ってくださっていることが、魅力の一つなのであろう。

② 自然そのものが教材として効果的に機能していること

本校にはプールがない。したがって水泳の授業は、海で行う。潮の流れのせいで思うように泳げないこともある。教室の水槽では海の生き物を飼っている。死んでしまったり、他の生き物に食べられてしまったりすることが度々である。

また、畑にはヒマワリが葉を広げ、校庭にはたくさんの花の鉢が置かれている。しかし、台風や大雨で茎が折れてしまったり、塩害で枯れてしまったりしているものもある。自然はよいことばかりではなく、子どもたちに切実感のある問題や困難を与えてくれる。「生きる力」を育む上では最高の教材なのである。それも魅力の一つと言えるであろう。

これら二つの魅力を最大限に生かせるかどうか…今後の私自身の手腕が問われていることに緊張感を覚える今日この頃である。

「こんにゃく問答」

下松市立豊井小学校長　武居利彦

落語の「こんにゃく問答」。その後半、こんにゃく屋の六兵衛さんと旅の僧が問答する場面は、「学び」の観点からみると、奥深い問答だ。

僧は、両手の親指と人差し指で自分の胸の前に輪を作って前へ突き出した。すると六兵衛は、両手で大きな輪を作って見せた。すると、「はっはあっ」と僧は平伏する。

次に、僧は十本の指を前に突き出す。六兵衛はそれを見ると、五本の指をぐっと突き出した。また、僧は平伏する。

それから、僧は三本の指を立て前に突き出す。六兵衛は目の下に指を置き、大きく「あかんべえ」をした。すると、僧は恐れ入って平伏し、逃げるように立ち去ろうとする。

八五郎は、「問答はどっちが勝ったのか」と僧に尋ねる。僧は、「自分の負け」と言う。何を聞いても黙っているので、無言の行と悟り、「大和尚の胸中は」と問うと、「大海のごとし」という答え。「十方世界は」と問えば、「五戒で保つ」との仰せ。「三尊の弥陀は」と問えば、「目の下にあり」と言う。

僧は、観念して逃げるように退散した。

ところが、六兵衛さんはそういうようには考えていない。

「俺がこんにゃく屋のおやじだと分かったもんだから、てめえの所のこんにゃくはこれっぽっちだと小さい丸をこしらえて、手でけちをつけやがった。だから、俺の所のこんにゃくは、こんなに大きいと手を広げてやったんだ。すると今度は、十丁でいくらかと値を聞いてきやがった。五百だって言ったら、しみったれ坊主め、三百に負けろってえから、あかんべえをしたんだ」

同じこと（もの）を見ても、見え方がまるで違っている。僧は、それを仏教的奥義とみた。対して、六兵衛さんは、「取引」と受け取った。僧は、学びの構えをオープンマインドに開いている。しかし、六兵衛さんは、自己の「利」からこと（もの）をみて判断した。

僧は、学びの先が見えていない（わからない）から学ぼうとしている。六兵衛さんは、学びの先（内容の深浅は別問題として）が見えているから、その利を求めた。

さて、子どもの学びの構えは、どちらに近いのだろうか。

探訪シリーズ　この人　この歩み

地域づくりは生涯学習

楢原ゆうあい会　事務局長
西市小放課後子ども教室コーディネーター
柴田　俊彦 さん

平成十九年に鉄鋼会社を退職後、故郷の下関市豊田町楢原に戻られた柴田俊彦さん。地域の人々とともに、自然と歴史を生かした地域づくりの取組や「西市小学校放課後子ども教室」を進めておられます。地域への思いや子どもたちに伝えたいこと等について、話を伺いました。

＊定年退職後、故郷に戻って地域づくりに取り組みたいと思われるようになったきっかけを教えてください。

故郷に戻った理由は、高齢の母の存在と「土に親しむ生活をしたい」という妻の希望です。妻から勧められたセミナーパークでの「生涯学習プランナー養成講座」の受講がきっかけです。

岩国市美和町長谷の廃校で、地域づくりの実習をしました。指導者と学校に泊まりながら地域の人たちと学校施設の有効活用を話し合いました。学校を拠点として地域の方々自らがその地域を何とかしようという熱意と誠意に、地域づくりの手応えを感じることができました。

＊故郷での地域づくりの活動は順調に進みましたか。

故郷に戻ってみると、獣被害や荒廃地が散見され、活気が感じられませんでした。そこで地域課題をどうにかしようと周りの人に声をかけましたが、「しょうがない」という雰囲気で、暗澹とした思いになりました。

このとき、講座を指導された先生の言葉が脳裏を横切りました。「会社で重要なポストにあったとしても退職すればただの人。肩書きで地域づくりはできない。それを切り抜けるのは生涯学習だ。自分でテーマを決め、自分で学んでいかないと自由の刑に服すことになる」と。強烈なメッセージでした。

そこで、民俗学者宮本常一の「地域はそこに住む者自らが作っていかない限り決して良くなることはない」の考えを理念に地域課題解決組織を立ち上げました。熱烈な賛同者もでき、感動の出会いがありました。会社での体験も役立ちました。防獣対策、花いっぱい、郷土史講座の開催などで交流人口も増えました。下関市の景観賞なども受賞しました。里山や歴史街道などを生かして自然と歴史を学べる「学びの郷　楢原」づくりが今、進められています。

＊「西市小学校放課後子ども教室」で子どもたちに伝えたいことは何ですか。

放課後子ども教室は、子どもと大人の学び合いの場であり、生涯学習の実践場だと思います。

学校の御理解と地域の人々の御支援で年間、二十五回の活動を行っています。活動内容は、体験を基本に、坐禅や俳句、茶道、華道から、野菜作り、藍染め、グラウンドゴルフなど多岐にわたっています。年三回、子どもたちが夢について考え、語り合う機会があり、かべ新聞や色紙に描いて「夢の見える化」をします。夢が目標になるように。

子どもたちにはやがてこの故郷を出て、広い世界で存分に活躍してほしいと思います。そして、そんな子どもたちへ小さな宝箱を贈りたいと思います。それは、子どもたちが自分の夢をふくらませたり、人との関わりの中で悩んだりしたとき、そっと手助けをしてくれるものが入った引き出しです。放課後子ども教室で、地域の人々とのふれあいの中でそんな宝箱を手に入れてほしいと願っています。

柴田さんは、会社で総務、人事部長等を歴任された中で、人を育てることの大切さを実感され「地域づくりは人づくりから、人づくりは学びから」と話されました。この考えは私たちの学校経営に通ずるところがあり、深甚な示唆を与えて頂いたと感じました。

（下関市立粟野小学校　長谷川裕司）

本部だより

平成三十年度の小学校長会総会が、新会員五十二名を迎え、計二百九十名となって、去る五月八日に開催された。昨年度の諸事項が報告・承認されたのち、役員改選が行われ、吉鶴修新会長のもと、新たな役員を加えてのスタートとなり、活動方針及び事業計画、予算、各専門部からの提案等が承認された。

本年度は、新しい学習指導要領の移行期の一年目となり、完全実施となる二〇二〇年度に向け、各学校で様々な取組が始まるとともに、その取組の検証も実施することとなる。それは、学校教育が目指してきた「生きる力」を子どもたちに培うことであり、そのために、校長は、明確なビジョンを掲げ、学校組織の活性化を図り、創意ある教育課程の編成・実施・評価・改善に努めなければならない。言い換えれば、子どもたちが未来を切り拓くための資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」を実現していくことである。

一方、働き方改革の推進が求められる中、適切な人員配置や教職員の資質・能力の向上を図るとともに、行事の精選や各種業務を見直し、改善していくことも必要である。

校長会には、これまで以上に情報を共有し、連携を図りながら、各課題を解決し、小学校教育の質を一層向上させるためのリーダーシップが求められている。